

熊本	不知火類小さな産地の大きな挑戦 —施設栽培におけるヒリュウ台「肥の豊」の導入—
(発表者) 果樹・花き産地づくり支援班 参事 楠田 理奈	

1. 背景・普及活動の目標

熊本市北区植木地区では、現在、施設栽培で不知火類が約12ha栽培されている。平成20年当時、不知火類が導入されてから年数がたち、高樹齢による樹勢低下・密植・高樹高や収量低下・品質低下が問題となっていた。一方で、平成12年に果樹研究所で不知火の優良系統である「肥の豊」が育成された。「肥の豊」は従来の「不知火」と比較し品質良好だが、樹勢が旺盛であるという特徴から露地栽培での導入が前提となっていた。また、樹勢が強いカンキツでは以前から高品質・安定生産を目的として、「ヒリュウ台」を利用する技術があり、施設栽培「肥の豊」においてもヒリュウ台利用して樹勢をコントロールすることで高品質果実生産の可能性が示唆されていた。そこで、ヒリュウ台「肥の豊」を核とした経営による施設栽培不知火類の収益向上を目指し、JAと連携して普及活動を開始した。

2. 普及活動の内容

活動を始めた当時は、施設におけるヒリュウ台「肥の豊」の栽培事例が少なく、情報が少ない、栽培・管理方法が確立されていない、普及員・JA指導員とも知識が不足している、という状況であった。また、これまでの他品種の経験からヒリュウ台は幼木期の管理が重要であると考えられた。そのため、情報の蓄積、栽培・管理方法の確立、指導員の技術の習得・研鑽、生産者への指導を同時に行うことが必要であった。そこで、①展示ほ活動、②栽培管理講習会、③園地巡回・個別面談を柱として活動をスタートした。



① 展示ほ活動

基礎的な生育データを収集し、生育特性を把握するために、定期的な生育調査を実施した。また、実証試験を実施し、幼木期の適正着果量や間伐による品質向上対策等を検討した。さらに、JA、果樹研究所、農業革新支援センターと連携し、重要な管理時期に現地検討会を開催した。検討会では、産地の（JA 営農？ 県の普及？）指導員がせんだい検討会を行い、指導員の知識の定着を図った。

② 栽培管理講習会（全体への働きかけ）

JA 部会の管理講習会を展示ほで実施し、展示ほの生育状況を実際に生産者に見てもらおうとともに、生育データや実証試験の結果を報告し、特性を十分に理解してもらうことで、導入を推進した。



また、平成25年には、展示ほの生育調査と実証試験の結果をもとに導入ガイドを作成し、幼木期の指導に活用した。

しかし、ヒリュウ台「肥の豊」の導入が増加する一方で、従来の台木と同様の管理を行ったことが原因で生育が劣る園が発生したため、管理講習会だけではなく会議など生産者が集まる場を利用して苗木期の管理の重要性を重点的に指導した。

③ 園地巡回・個別面談（個別指導）

活動対象とした生産者は、土地条件、作型、経営形態、果樹栽培の経験等が異なり、それぞれの状況に応じたきめ細やかな指導が必要であった。そのため、新たにヒリュウ台「肥の豊」を導入した生産者に対して、定期的に巡回指導を行った。また、年1回個人面談を行い、出荷実績や経営状況の現状をふまえて、ヒリュウ台「肥の豊」の導入を含む改植等の計画を生産者、JA、普及・振興課3者で検討した。



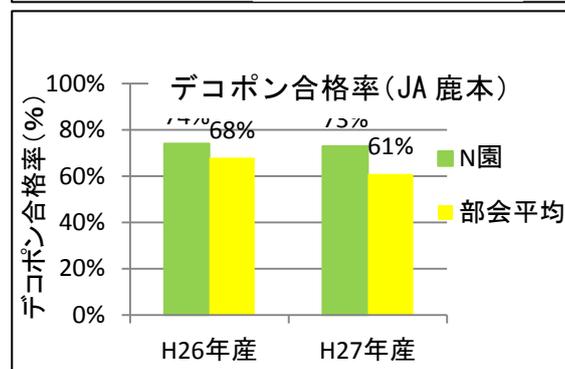
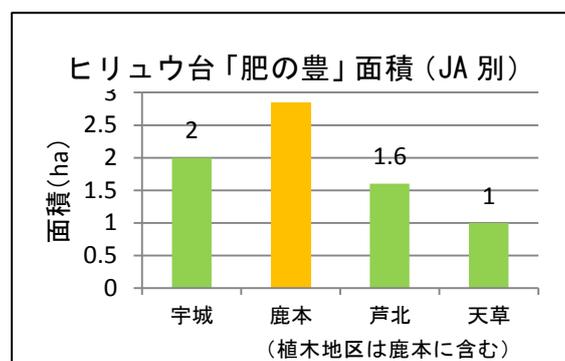
3. 普及活動の成果

以上のような普及活動を行った結果、平成25年頃から面積が拡大し、平成28年（計画を含む）には施設栽培におけるヒリュウ台「肥の豊」が県内で最も多く栽培される産地となった。

平成26、27年産において、展示ほ園でのデコポン合格率は70%とJA平均を上回り展示ほを設置した生産者がJA鹿本の不知火類出荷成績で優秀な成績を収めた。

その他の波及効果として、苗木の管理を重点的に指導したことで、苗木の管理技術の高い生産者が育ち、生産者からより経営的な視点の話が出るようになった。

今回の普及活動は、情報・知識・技術が不足する中でのスタートであるとともに、ヒリュウ台の産地化のためには失敗できない、というハードルがあった。このハードルを乗り越え、スピード感のある普及活動が展開できたのは、関係機関との連携、展示ほの活用、部会の講習会の活用、生産者の協力であると考えられる。この経験は今後の普及活動に活かせると感じる。



4. 今後の普及活動に向けて

年によって、品質・収量が若干不安定なため、毎年、高品質で安定した収量を確保することが今後の課題である。そのために、設備の導入の検討と温度・水分管理の徹底を指導強化する。

そして、ヒリュウ台「肥の豊」を核とした経営で部会全員の経営の底上げと向上をはかり、品質面・経営面で県内一の産地になることを目指す。